

受賞者の横顔

飯田三郎さん

(特別賞)

郷土芸術賞に輝く

<下>

も嬉しいですね」と飯田さんは相づちがある。その意味できびしい道徳、作曲家池内友次郎の門をたたいて、作曲家に限りない可能性を感じて、二十五歳であった。キングに入社、流行歌も手がけたが、飯

好をくすした。かつて国民の歌「若い日本」の

作曲に限りない情熱

地方にこそ本当の文化が

作曲で、わが国トップクラスの作曲家と競作、みごとに文部大臣賞を獲得したのをはじめ、これまでにも数々の受賞の経験を持つ飯田さんだが、郷土からのこんどの特別賞はまた格別らしい。「文化が中央中心の時代は終わった。地方にこそこれからの本当の文化の土

それが、釧路での蝦夷太鼓とな

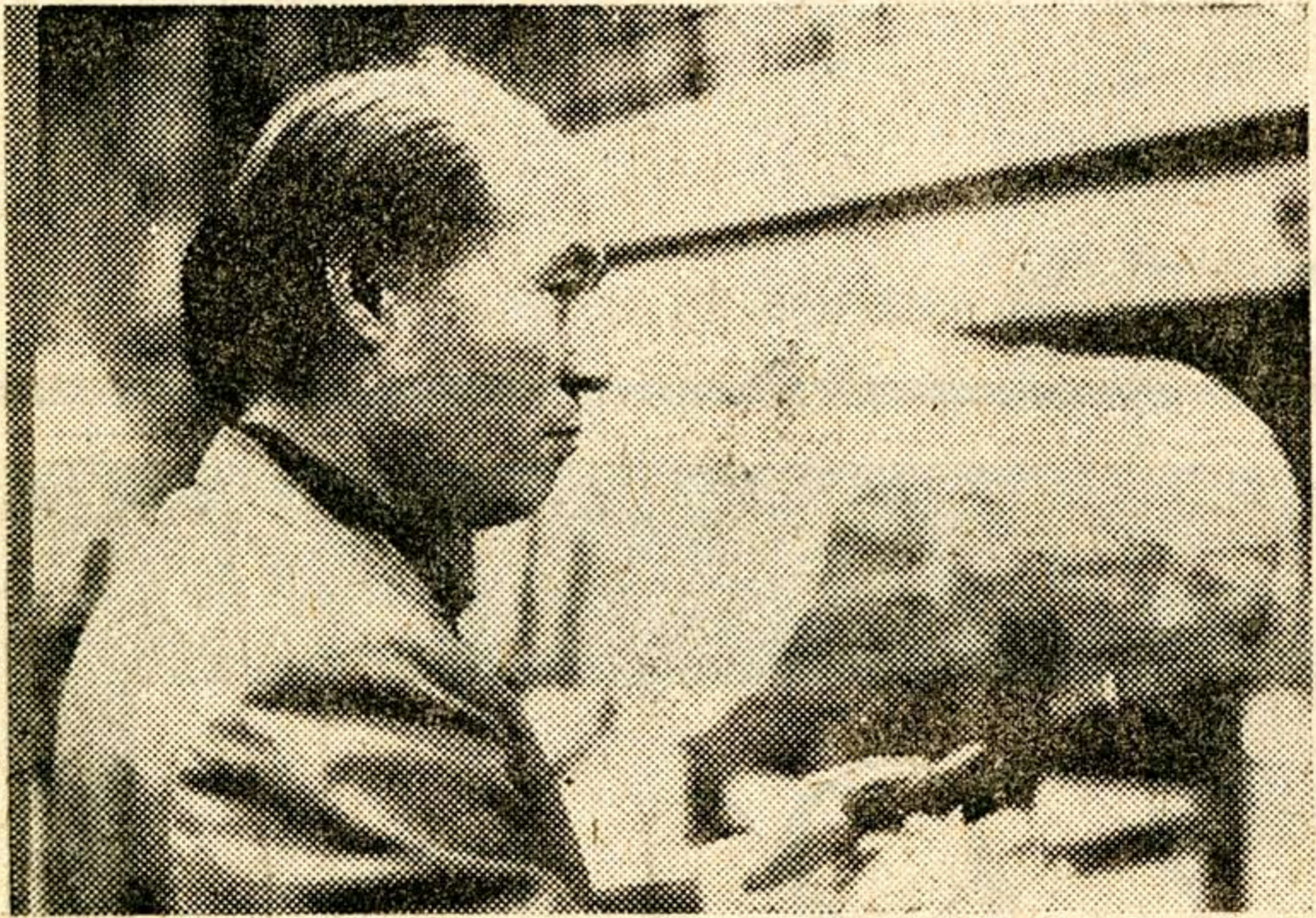
田さんのメロディーは、やはり北

国人らしい哀愁があつて人々の胸

を打つ。戦後のヒット曲「啼くな

小鳩よ」「ここに幸あり」などで

注目すべき仕事を残した。東京才「来たれ」を作曲。リンピックでは「海を越えて友よ」この数年、釧路市民憲章のソロカン作曲、星園高、清明、朝陽小校歌、阿寒バス社歌、阿寒町丹頂鶴音頭、鶴居村音頭、白糠駒踊り音頭、浜中町歌、厚岸音頭など郷土からの依頼に気軽に応じた。こうした実績の中に飯田さんの地方文化への深い理解がある。



「郷土にも若いすぐれた人たちが育ちつつある。僕はバイオニア的な意味でその人たちの礎になりたい。こんどの賞がそうした啓蒙の意味であれば、責任はますます大きくなります」日本の音楽家としては初めてカトリック教会のミサ曲を完成、ローマ教皇より褒状も贈られた。新しい分野への芸術家的意欲のすさまじさ。いまオラトリオ「蝦夷キリストの殉教」の作曲に没頭している。青年のような情熱はまだ失われていない。

道東の風土に限りない可能性を感じる―飯田さん

東京・芝金匂台の閑静な住宅街の一角にある飯田さん宅。特別賞受賞の知らせに「郷土の皆さんから賞をもらうなんて、勲一等より